

専門「協賛」科目と連携したレポート作成支援の試み —学部留学生の日本語学習支援として—

A Trial of the Research Paper Supports Cooperated with Specialized Subjects
— As Japanese Learning Support of the Undergraduate Foreign Students —

舟橋宏代*・大本達也**

Hiroyo FUNAHASHI, Tatsuya OMOTO

要旨

学部留学生が、「協賛」する専門科目の課題レポート作成にあたり、支援を受けることのできる日本語の授業を開設した。あらかじめ、専門科目を担当する専任教員に理解を求め、協賛を得られた科目名を留学生のオリエンテーションで周知した。レポート作成支援の過程で、専門科目の内容及びレポートに関する指示が学習者に伝わりにくいこと、学習者の資料読解に問題があること、形だけのレポートを仕上げがちであることが指摘された。

キーワード：学部留学生、日本語、レポート作成支援、協賛科目

1. はじめに

鈴鹿国際大学は、学部留学生を対象とした日本語科目として、日本語Ⅰ～Ⅲを開講している。日本語Ⅰは1年生前期、日本語Ⅱは1年生後期、日本語Ⅲは2年生以上の前期に配当されている。日本語Ⅰ・Ⅱのクラスは、4月に行われるプレースメントテストの成績順に割り振られる。学習者は、1年生のうち日本語の運用能力別に分けられたクラスで、大学生活を送るために必要な日本語運用能力を磨くことになる。

学部留学生の必修科目となっている日本語作文Ⅰ・Ⅱでは、Ⅰでスピーチ原稿を書くことを、Ⅱではレポート作成を学ぶ。本学の日本語科目全科目において、学習者による授業評価が行われており、その結果によると、学習者は日本語作文Ⅰ・Ⅱのような書記能力を養成する授業に肯定的な態度で臨んでおり、多くの者がもっと書く練習がしたいと述べている。¹⁾にもかかわらず、2年生以上になり、日本語科目すべてが選択科目となると、日本語作文Ⅲのレポート作成支援科目を履修する学習者は極端に少なくなってしまう。しか

* 本学准教授、日本語教育 (Japanese Language Teaching)

**本学非常勤講師、近現代日本文学・思想 (Japanese Literature in 19-20th Centuries)

も、日本語の運用能力が比較的 low、レポート作成に支援が必要なはずの学習者が履修を避ける傾向がみられる。

2年生以上の学習者が日本語作文Ⅲの履修を避ける理由はいくつか考えられる。そもそも日本語Ⅰ・Ⅱは、留学生全員が作文を履修するため、学部留学生1年生の人数に合わせたクラス数²⁾が用意され、それぞれ「会話」「講読」「作文」が開講されている。これに対し、日本語Ⅲは3クラス用意されており、それぞれ「会話」「講読」「作文」という名はついているものの、実際には9種類の学習内容が展開されており、プレースメントテストの結果に関わらず、どのクラスでも履修できるようになっている。自分のニーズに合った授業を選択できる反面、そこは今までなじんだクラスメートと一緒にいられる、ホームルームのような場ではなくなっている。また、学習者の多くは、文章を書くことに対して苦手意識を抱き、文章を書くことは難しいと感じている。³⁾ そのため、大学入学後の1年間をやっとの思いで乗り越えた学習者は、ほっと一息つきたいこの時期に、苦手で難しい「作文」の履修を避けるのではないか。

そこで、学習者の負担を軽減し、学習者にとってより履修しやすく、しかも実践的な指導を受けられる「作文」授業を企画し、実施してみることにした。これは、2010年度前期に2年生以上の学部留学生を対象として開講された「日本語作文ⅢA」⁴⁾の報告である。

2. 一般「協賛」科目と連携したレポート指導

鈴鹿国際大学で従来行われていた日本語「作文」科目におけるレポート指導では、レポート課題を出し、作成されたものを、日本語科目としての基準で評価している。

深澤(2005)は、日本語科目の作文指導において、日本語教員は、学習者の産出する文章が日本語として文法的に正しければよしとしてしまい、明解さを重んじず、あいまいさを排除することに敏感ではない傾向にあると指摘している。これに対し高木(2005)は、専門教員側は、「文章はあまりよくなくても、内容が正しければとりあえずよし」と考えがちであるとしている。日本語科目において「文法的に正しい」ことを目指した指導の結果が、果たして、内容を重視する専門科目においてどのように評価されているのかということについて、実態を把握し、専門科目の要求するレポート作成を支援できる体制を作っていく必要がある。

大島(2005)は、専門科目におけるレポート作成支援のため、留学生を含む学部1年生の前期必修科目において、日本語担当教員と専門教員がティームティーチングを行った事例について報告している。ここでは、日本語担当教員が主担当として、学習項目に関する説明を行い、専門教員は学習内容に関する説明や、文章作成のアドバイスなどを行っている。大島は、専門教員が作文の授業に加わることにより、専門科目のレポート作成を支援するのだという大学側の姿勢を伝え、学習者の履修動機を高め、専門教員が要求する文章の書き方に関する明確なメッセージを伝えることができたとしている。また、日本語担当教員

と専門教員が協力して授業を作り上げ、それを全学に向けて公開することにより、教員どうしの交流が活性化されたという。その一方で、作文指導の授業に専門教員が参加するのは、専門教員にとって負担増であること、専門分野や文章指導観の違いに折り合いをつけて共同で授業を行うためには、意思疎通に気を配り、意見を調整して協力関係を維持するために、コーディネーターの尽力が必要であることが問題点としてあげられている。

鈴鹿国際大学においても、大学教員の業務が多様化し、量的にも増加傾向にあるため、専門教員の負担を増やすことは避けたいと考えた。そこで、専門科目のレポート作成を支援する科目を、「日本語作文ⅢA」として開設することにした。まず、担当科目の成績評価のために課されるレポート課題を、日本語作文ⅢAの最終課題とし、日本語担当教員に一部その指導を任せることのできる科目を「協賛」科目として専門教員に申請してもらう。その協賛科目では、レポート課題を早期に発表してもらい、作成を支援したレポートに対する専門科目としての評価とともに、日本語科目において支援した成果および今後の課題について助言を得ようというものである。これは、専門科目のレポートを日本語Ⅲで支援を受けながら作成して、専門科目と日本語科目、あわせて二科目の単位が取得できる、学習者にとって一石二鳥のしくみである。このようなしくみを作ることで、「作文」を履修する負担感から学習者を解放し、その一方で、日本語担当教員と専門教員が交流することで、よりよい指導を模索することもできると考えた。

1年生対象に開講されている「日本語作文Ⅱ」のレポート指導では、「事実」と「意見」を区別しつつ、主観的表現や話しことばを排除し、パラグラフ・ライティングを行うよう、レポート作成をするための基礎は指導されているが、ここで学んだことが、果たして実際に専門科目のレポート作成の際に生かされているかは疑問である。学習者、特に日本語運用能力が十分でない学習者は、レポート作成における一般的な注意事項を理解していても、参考文献や調査などから得た情報を文章にまとめるだけで精一杯であり、レポートのあるべき姿を追求する余裕はない。日本語作文ⅢAでは、現実の専門科目のレポートを作成する過程で支援を受けることにより、自己のレポートを改善していく経験を積むことができ、今後のレポート作成、ひいては論文作成に生かしていくことができるのではないかと考えたのである。

3. コース開始まで—学内における合意形成と協賛依頼—

専門科目のレポート作成支援を行う日本語作文ⅢAを開設するにあたり、そもそもこのような趣旨の日本語科目を開設することに対する承認を、学科会議及び関係委員会に求め、(資料1⁵⁾参照)異議なく承認された。協賛を募る方法については、専任教員に対して協賛可能な科目を募り、協賛を得られた科目名を、4月のプレースメントテストの際、学習者に配付する、「日本語ⅢA」講義要項の追加資料に記載することになった。この結果を受けて、「日本語作文ⅢA」に協賛可能かどうかを尋ねるアンケート用紙(資料2⁶⁾参照)を

専任教員全員に配付し、そのうち 13 名から回答を得た。13 名の回答の内訳は、以下の通りである。

表 1 専任教員に対する協賛可否アンケートの結果

(1)	留学生の履修者に対してのみレポート作成指導を行う必要を感じない。	1 名
(2)	留学生の履修者に対してレポート作成指導を行う必要は感じるが、担当科目においては協賛不可能である。	3 名
(3)	留学生の履修者に対してレポート作成指導を行う必要は感じるし、協賛に興味はあるが、今回は協賛しない。	4 名
(4)	留学生の履修者に対してレポート作成指導を行う必要があり、今回協賛してもよい。	5 名 (5 科目)

予想したより多くの専任教員より好意的な回答を得ることができた。(3)の、今回は協賛しないという回答のうち、協賛可能な科目は後期にしかないという理由をあげた教員が 2 名あった。また、別の教員からは、レポートはコースの途中で提出するよう設定されており、その結果を成績に反映できるとは限らないため、今回は協賛しないという回答を得ている。

(4)の、今回から協賛が可能であると回答のあった 5 科目を協賛科目として、日本語作文ⅢAはスタートした。

4. 協賛科目課題レポート作成支援の流れ

日本語作文ⅢAに履修登録したのは 14 名である。そのうち、協賛科目のレポートを選択した学生は 8 名であり、そのうち 3 名(学習者 E、H、S)が専門科目①、5 名(学習者 K、B、T、C、G)が専門科目②を選択していた。

専門科目①は、前期開始時、期末に提出する詳細なレポート課題作成要領を履修者に配付し、筆者らにも通知している。この課題は、指定されたテキスト 1 冊を通読し、印象に残った部分と、印象に残った理由を記述するものであった。

専門科目②は 5 月 27 日に課題が発表され、その旨筆者らに対しても事前に通知があった。与えられたキーワードについて、各自でテーマ設定し、レポートを作成するというものである。以下、日本語作文ⅢAで、どのように協賛科目のレポート作成支援を行っていったか、時系列に沿って報告する。

表 2 レポート作成支援の流れ

日付	全体の指導事項	専門科目①履修者の指導	専門科目②履修者の指導
4/7	導入・文献検索 1 授業の主旨説明	履修者確認。2名確認(G,E)。	履修者確認。履修者なし。
4/14	文献検索 2 授業の主旨再説明		
4/21	レポート構成について 1		
4/28	レポート構成について 2		
5/12	要約・引用の方法 1		履修者 5名(K,B,T,C,G)が判明。 (Gは①②ともに履修)
5/19	要約・引用の方法 2	履修者さらに 2名(H,S)判明。	
5/26	要約・引用の方法 3	4月に発表済みのレポート課題をようやく確認。講読計画を作る宿題を課す。	5/27 発表のレポート課題を確認するよう指示。
6/2	要約・引用の方法 4 レポートテーマ決定	6月末までに指定テキストを読了するよう指示。	課題のキーワードの調査、文献検索を宿題とする。
6/9	レポート中間発表 1 進捗状況の報告 レポートの書き方について	H,E : ほとんど読んでいない →宿題、再発表を指示。 S : p.26 まで読了 →内容紹介、次回 p.80 まで読むよう指示。	履修者 G が②で支援を受けることを表明。 K,G : キーワードについて発表 →テーマ決定を宿題とする。 B : 何もしていない →再発表を指示。 T : テーマを決定し、参考資料を持参 →資料を熟読するよう指示。 C : テーマを決定 →より具体的なテーマを考えるよう指示。
6/16	資料の整理・メモ作り 1 レポート中間発表 2 レポートの書き方について	H : p.70 までの内容報告。 S : p.67 までの内容報告。 E : p.42 までの内容報告 →通読し、メモ作りをするよう指示。	T : 資料を検索中。 C : テーマを決定。資料発見 →資料通読を指示。 G : テーマ未定 →テーマ決定を指示。
6/23	資料の整理・メモ作り 2 レポート中間発表 3	○進捗状況の報告 S : p.120 まで読了	K : 基礎資料 3冊持参 G : 資料 2冊持参

		E : p.108 まで読了 →読了後、引用メモ作りするよう指示。	C : 資料 1 冊持参 →レポート作成を指示。 B : ベトナム語インターネット資料を発見 →資料の信頼性を確認してレポートを作成するよう指示。
6/30	レポート中間発表 4	H : p.130 まで読了、内容・感想を報告。 S : p.150 まで読了 E : p.140 まで読了 →読了後、引用メモ作り、可能ならレポート作成に入るよう指示。	K : レポート提出 →本論の展開不足のため修正して再提出を指示。 B ,G : 未提出 →次週提出を指示。 T : 未完成レポート提出 →次週提出を指示。
7/7	レポート中間発表 5	全員がほぼ読了。メモ・レポートの提出はなし →提出指示	全員レポートを提出、協働推敲 →修正したものを再提出するよう指示
7/14	レポート仕上げ	全員提出、協働推敲 →個別指導日設定 (7/19 が専門科目の提出期限)	全員再提出 →個別指導日設定 (7/15 が専門科目の提出期限)
7/21	レポート提出 (専門科目で提出したものを提出)		

5. 協賛科目レポート作成支援過程における問題点とまとめ

協賛科目レポート作成の支援における最初の問題点は、協賛科目履修者の確定に時間がかかったことである。最初の2回程度で把握するはずだったが、次々に履修の事実が判明し、最終的に把握できたのは6回目の授業で、5月半ばを過ぎたころであった。これはひとえに学習者の自己申告を鵜呑みにしてしまったためである。教員の指示を学習者が十分に理解していなかったり、聞き流したりしている可能性があることを、日本語教員は強く意識しなければならないことを痛感した。

次に専門科目①指導における問題点について述べる。この専門科目は、4月に行われた第1回目の授業において早々にレポート課題が発表されていた。さらに、学習者は指定書籍を4月中に購入済みであったにも関わらず、学習者は課題が何なのか、図書を購入したのはなぜなのかを理解していなかった。ここでも、学習者による教員の指示の聞き漏らしが発生している。このため学習者は、5月末まで課題を把握できないままであり、課題図書が何なのかも白紙の状態だった。その結果、学習者は6月からようやく資料講読を開始

することとなった。課題図書は決して簡単でない文体で書かれており、それを一ヶ月ほどで通読するのは大変だったものと思われる。文献通読の遅れにともなって、当然レポート作成の開始が予定より遅くなり、提出もぎりぎりになってしまった。

協賛科目②指導における問題点は、レポート課題の解釈である。課題は授業を受けている母語話者には自明の内容だったのかもしれない。シラバスは公開されているものの、専門教員が具体的にどのような授業を展開し、どのような資料を配布しているのかわからないため、その出題意図、どのようなレポートが求められているのか日本語教員には判断できなかった。今回は、学習者自身に設定したテーマの可否を専門教員に確認させ、了承を得た後、資料収集・レポート作成に取り組みさせた。このような問題は、レポート課題が発表される際、そのねらいに関する情報が書面により提供されることが可能であれば、回避することができるであろう。

全体的には、学習者の資料読解能力に問題があることが明らかになった。はじめから資料を読もうとしていない学習者もいるが、読もうとしても読解力の不足から読めないという場合もある。今回は読んだ内容を発表させ、資料読解の進捗や理解度を確認したのだが、内容が十分に理解できていない学習者が思いのほか多いことに気づかされた。課題図書や資料を授業中に一緒に読むということが無理である以上、同じ資料を読んでいる学習者同士で読解内容をチェックさせるなどの対策が有効であろう。

最後に、学習者によって作成されたレポートは内容が不足しているという大きな問題がある。レポートを形式的に整えさせることは授業中での指導で可能であるが、本論の展開となるとほとんどが個人的な作業である。今回の場合、授業中に協働推敲を行うなどしたが、それだけでは十分ではなかったため、授業時間外に個別指導の時間をとってレポートをチェックするという方法をとらざるを得なかった。しかし、限られた時間内での個別指導では、語句や表現の添削に終始してしまい、内容の吟味にまでは手が回らないのが実情である。

6. 学習者による評価と専門教員の評価

コース終了時、履修者 14 名のうち 10 名より授業評価のアンケートを回収した。10 名中、7 名は、この科目で専門科目のレポート作成支援を受けられることを知っていたが、プレースメントテストの際に説明をし、資料も配付してあるにもかかわらず、3 名は知らなかったという。

この授業が、専門科目のレポート作成に役立ったかどうかについては、6 名が書き方を理解でき、うまく書けたと思うと答えている。書き方の理解はできたが、うまく書けなかったと回答したのは 3 名、書き方はあまり理解できなかったが、いつもよりうまく書けたと回答したのは 1 名で、アンケートに答えた学習者すべてが、この授業を通じて、ある程度の達成感を得られたと言ってもいいのではないだろうか。また、授業の内容については、

すべての学習内容について役に立つ、面白いなどの反応が目立つ反面、7名が役に立つとしたレポートの構成を面白くなかったと答えた学習者が1名いたり、面白いというコメントが多数を占めた資料の整理・メモ作りを面白くないとする学習者が2名いたり、学習者自身がそれぞれに苦しみながらレポートに取り組んだ痕跡がみえる。学習者が難しいと感じたのは、自分の意見を表現すること(7名)、文章をまとめること(6名)、引用する文献の要約(4名)、文法的に正しい文を書くこと(4名)、字体や書式、参考文献の書き方を守ること(4名)である。

コース終了後、筆者らが専門教員に確認したところによると、専門科目において出された評価は、日本語科目で支援をうけたレポート以外の要素が加味されたこともあり、日本語作文ⅢAとしての評価との相関は認められなかった。

専門教員からは、日本語作文ⅢAの履修者が提出したレポートは、引用の表現を使用して出典が明示され、自他の意見を区別しており、レポートの形式が整っているという指摘がなされた。そのため、日本語科目で支援を受けている学習者が特定できなければ、形式が整ったレポートに対してはもっと高い評価をしたかもしれないという意見が聞かれた。

また、専門科目②の担当教員からは、形式に則ってレポートを作成しようとする意識はすばらしいことであるが、レポートについては、内容が感想文的であり、問題提起して立論し、それを検証していく態度に欠けているとの指摘があった。これはまさに、高木(2005)の指摘した、日本語担当教員の「日本語重視」と専門教員の「内容重視」のすれ違いから生じた問題である。また、学習者は専門用語の理解が不足しており、そのために内容がずれてしまっていたものもあったという。そのため、専門科目において、専門用語の解説を行い、キーワードをいかに扱い、どのように立論するかという点についての指導がなされるべきであるとの見解も、同教員より示された。

7. 総括

学習者による授業評価と、専門教員による評価を受けて、今回の協賛科目のレポート作成支援についてまとめてみよう。

まず、学習者は、思った以上に多くの聞き漏らしをし、専門教員の指示や授業内容を理解していない。これは教員の側の問題というより学習者側の問題であるが、この点をよく把握していないと、学習者のために早期に課題を設定して発表しても奏功しない恐れがある。今回の実践では、協賛科目履修者の確定に手間取ったが、この問題は、今後、履修科目表の提出を学習者に義務づけるなど、コース開始時のレディネス調査を確実に行うような工夫が必要となるだろう。また、学習者がレポート課題の発表及びその内容について把握できていなかったという問題について、今回は、日本語担当教員が専門教員からあらかじめレポート課題とレポート作成要領を受け取ったり、学生を介して専門教員の出题意図を確認したりする手続きが、伝達における学習者へのミスプリントを修正する手段となっ

たが、今回は今回の問題点を専門教員と共有し、問題を未然に防ぐ手段を講じたい。

また、専門教員から内容が不足しているという指摘を受けた通り、学習者は形だけのレポートを出すことがある。インターネットのサイトなどにある記述をコピーしてそのまま貼り付けたり、それらを加工したもので済ますことも日本人学生同様ある。今回はそのような事例は見られなかったが、正確でまとまりのある日本語の文章が書けない学習者もあり、そうした学習者が、インターネットからの切り貼りを、独力でレポートを作成する唯一の手段と考えてしまうことは想像に難くない。学習者による授業評価によって明らかになったように、レポート作成というのは、学習者にとってかなり難度の高い課題である。文法的に正確な文を書かなければならない上に、自分の意見を表明して文章をまとめなければならない。その上に字体や書式、参考文献の書き方を揃えるなど、形式を整えることまでが要求されるのである。日本語運用能力の低い学生は頭も手もまわらないため、レポート作成を支援する過程においては、教室で一度全体としての指示を出しただけでは不十分で、根気よく何度も個別に指導しなければならない。レポート作成指導は、様々な技術を少しずつ定着させていく過程なのである。

とはいえ、今回の実践で必要に迫られて行った授業時間外の個別指導という方法では、一人あたりに割ける回数及び時間が限られるため、「添削」に終始する従来型の「日本語指導」から抜け出すことができない。レポート課題を、できれば解説付きの書面で早期に学習者に提示するよう専門教員に協力を求めると同時に、限られた時間の中で、内容の充実までを指導することができる効果的な教室活動を行う必要がある。そのためには、池田(2007)の提唱するような学習者間の協働学習の可能性と限界を探り、個別指導とどのように組み合わせしていくのかについて今後検討していく必要がある。

8. おわりに

今回行われた、専門「協賛」科目のレポート作成支援の試みを通じて、様々な問題点が浮かび上がったが、これらの問題は以前から存在しており、問題をかかえた学習者たちは孤軍奮闘してきたわけである。今回、専門科目のレポート作成を支援することにより、学習者の抱える問題点や悩みの一端を明らかにすることができたという意味で、意義のある取り組みであったと言えよう。また、学習者からも、専門教員からもこの実践が有益であったというコメントを得ており、筆者らもこうした支援を今後も改善しながら継続していく価値があるものと確信している。

スポーツに例えると、これまで選手としての学習者は、1年次の日本語科目「日本語作文Ⅱ」でレポート作成の「練習試合」を1度だけ行なったあと、2年次よりたった一人で専門科目での「本試合」に出ざるをえなかった。「日本語作文ⅢA」における専門科目のレポート作成支援は、コーチたる担当教員が選手たる学習者に「本試合」を通じて戦い方を教える実践指導である。コーチから実践での戦い方を学び、一人で戦えるようになったと

き、学習者は日本の大学・日本の社会で生きていくことができる自立した選手になることができる。今後とも、専門教員と日本語教員が手を携えて、自立した学習者の育成に努めていきたい。

注1) 舟橋 2009 によると、2007 年度日本語作文Ⅱの授業評価アンケートに答えた学習者全員が、コースを「役に立つ」と評価している。「後期の目標が達成できたか」という設問においても、「ばっちりとはまではいかないが、ちょっとだけはできた」「レポートの書き方がだんだんわかるようになった」「書けるようになった」という声が聞かれた。

注2) 2009 年度までは 5 クラス、2010 年度は 7 クラス開講されている。

注3) 舟橋 2009 で報告されている、2007 年度日本語作文Ⅱの授業評価アンケートでは、今後勉強したい内容を尋ねた設問において、「レポート書くのがいやですけど、でも勉強になりますので、やはり書き方についてもっと勉強したいと思います」という記述が見られた。学習者が、書くのはいやだが勉強しなければならないというストレスを感じていることが垣間見える。

注4) 日本語ⅢAは、大本が授業を担当し、舟橋が協賛科目との連絡及び授業の進行状況の確認、コース終了後の協賛科目担当教員インタビューなどを行った。

注5) 紙面の都合上、シラバスの一部と、協賛方法案の一部を削除した。

注6) 「専門科目」とは、語学科目ではない、理論科目のことを言うのであるが、鈴鹿国際大学国際学科においては、「2 年生から分かれるコース別の専門科目」と捉えられる恐れがある。混同を避けるため、学内の書類では「専門科目」を、語学科目以外のもの、という意味で「一般科目」と称している。

【参考文献】

池田玲子(2007)「第 4 章 ピア・レスポンス」『ピア・ラーニング入門』ひつじ書房

大島弥生(2005)「日本語教員と大学専門教員による作文指導のティームティーチングの試み」『作文教育における日本語教師と大学専門教員との協力のために』日本語教育ブックレット 8、国立国語研究所

高木隆司(2005)「論文作成や発表用資料作成の指導をどのように行うか」『作文教育における日本語教師と大学専門教員との協力のために』日本語教育ブックレット 8、国立国語研究所

深澤のぞみ(2005)「作文指導における日本語教師の視点と大学専門教員の視点」『作文教育における日本語教師と大学専門教員との協力のために』日本語教育ブックレット 8、国立国語研究所

舟橋宏代(2009)「プロセス・ライティングを支えるミクロの課題—学部留学生のレポート指導に求められるもの—」『鈴鹿国際大学紀要 CAMPANA』No.16

(資料 1)

科目名	日本語作文ⅢA
教員名	大本達也
対 象	国際学科2007～2009 日本語 2年次、 選択 2単位
<p>【授業の目的・内容】 レポートを作成する。<u>レポートのテーマは、この授業の指定テーマか、あるいは一般科目のうち指定科目一科目のテーマどちらかを選択し、指導を受けることができる。</u></p> <p>【到達目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 必要な資料を検索、収集できる。 2. 日本語におけるレポートの書式に習熟する。 <ol style="list-style-type: none"> ① 要約と引用の技術を身につける。 ② 仮説の提示、立論を行い、独自の主張を展開することができる。 ③ 発表資料およびレポートを作成することができる。 	
<p>【授業計画】</p> <p>第1週 導入ーレポートとは</p> <p>第2週 文献検索について</p> <p>第5週 要約と引用練習1、レポートテーマ発表</p> <p>第6週 要約と引用練習2</p> <p>第7週 要約と引用練習3、レポート中間発表1</p> <p>第8週 要約と引用練習4、レポート中間発表2</p> <p>第9週 自説の展開 1、レポート中間発表3</p> <p>第10週 自説の展開 2、レポート中間発表4</p> <p>第11週 「序論」と「結論」、レポート中間発表5</p> <p>第12週～第14週 レポートの修正・編集</p> <p>第15週 レポート提出</p>	
<p>【その他】</p> <p>*一般科目一科目のレポート作成を支援するが、そのレポートの合格は保証しない。</p>	

日本語作文ⅢAに関する提案

2009-12-16 舟橋

1. **提案の目的**
 - ①実践に即した指導
 - ②留学生（特に編入生）の負担軽減
 - ③作文回避の傾向に対する対策
2. **提案**

日本語作文ⅢAでは、担当教員の指定テーマだけではなく、学生が履修している、この科目に協賛する科目のテーマでレポートを書くための指導を受けることができるようにする。
3. **協賛方法**
 - ① 5月の連休明けにレポートのテーマを提示
 - ② レポートは、日本語担当教員により日本語作文ⅢAとしての評価と、一般科目としての評価を受ける。
 - ③ 日本語担当教員、一般科目担当教員はそれぞれの評価および所見を交換し、改善点を模索する。
4. **協賛を募る方法案**
 - ①「あらかじめ、一般科目のうち文系科目の教員に理解を求め、協賛科目を募り、科目名をシラバスに記載する。（専任教員の科目のみ依頼）
 - ②「あらかじめ、すべての教員に本科目の趣旨を説明しておき、学生が個々に、必要に応じて一般科目の担当教員に早期のテーマ提示を依頼する。

(資料2)

日本語作文Ⅲの実施に関わるお願い

2010年3月10日 日本語担当

日本語作文ⅢAでは、実際に一般科目のレポート作成が可能な指導を行いたいと考えています。そこで、日本語作文ⅢAの最終課題に、この授業の趣旨にご賛同いただける先生が担当する授業で課されるレポートを選択できるようにしたいと思います。大変お手数ですが、以下の質問にお答えいただき、3月19日(金)までに、アンケート回収箱もしくは舟橋のメールボックスに入れていただけますようお願いいたします。

1. 先生の担当する科目で出されるレポート課題を、日本語作文ⅢAの最終課題として指導を行うことについて、どのようにお考えですか。一つ選んで、その記号を□の中に書いてください。また、コメントがあれば、余白に自由にお書きください。

□ (1) 留学生の履修者に対してのみレポート作成指導を行う必要を感じない。

(2) 留学生の履修者に対してレポート作成指導を行う必要を感じるが、担当科目においては協賛不可能である。

(3) 留学生の履修者に対してレポート作成指導を行う必要を感じるし、協賛に興味はあるが、今回は協賛しない。

(4) 留学生の履修者に対してレポート作成指導を行う必要があり、今回協賛してもよい。

2. 1で(3)または(4)を選択された方は、下記にご記入ください。

(3)を選択された方 ご氏名 _____ 科目名 _____

(4)を選択された方 ご氏名 _____ 科目名 _____

3. 2で(4)を選択された方は、2010年5月10日(月)までに、レポートのテーマもしくは課題をご提示下することが可能ですか。一つ選んで、○をつけてください。また、コメントがあれば、余白に自由にお書きください。

() 前期開始時にレポートのテーマもしくは課題提示が可能である。

() 前期開始時は無理だが、2010年5月10日(月)までにはレポートのテーマもしくは課題提示可能である。

() 2010年5月10日(月)までにはレポートのテーマもしくは課題提示可能であるが、できれば _____ ごろまでの方がよい。 ありがとうございました。